

■ 編集だより

編集後記

新聞広告に誘われて、東京江戸博物館で開催された特別展「明治のこころ—モースが見た庶民の暮らし」を観に行った。エドワード・モースは明治10年に貝の研究を目的に日本を訪れ、その後東京帝国大学で教鞭をとった。わが国で彼の名を知らしめているのは、やはり大森貝塚の発見であろう。米国から横浜港に辿り着き、汽車で新橋に向かうその車窓から、線路沿いに露出した貝塚の存在に気付いたというから驚きである。私が勤務する東邦大学医学部はこの大森の地にあり、精神神経医学講座のシンボルマークにも貝があしらわれている。

モースは日本で見るものすべてが新鮮で興味深かったようで、そのうち通訳なしでもあちらこちらを歩くようになり、目にとまった生活用品を購入したり譲ってもらったりして集めて回った。それらが現在ボストン美術館などに「モース・コレクション」として収蔵されている。

モースが撮影した写真やスケッチを添えながら、花器から下駄にわたる奢侈品から実用品、さらには当時のままの砂糖菓子や海苔まで、明治の暮らしを彷彿とさせる多くの「もの」で、観る者を飽きさせない充実した展示内容であった。日用品といえどもその製作における細かく丁寧な作業のあとがうかがわれ、穴の開いたやかんの溶接修理といったように、人々が大切に使い続けた様子もみてとれた。一方で、実用的なだけでなく、虫の形の掛け花入れといったように、身の回りの自然がさりげなくそのデザインに取り入れられているものも多い。モースはその著書「日本その日その日 (Japan Day by Day)」に、「(花入れの製作を) 正確にやり得る原因は彼等が自然を愛し、かつ鋭い観察力を持っているからである」との言葉を残している。また、「子供が誤って障子に穴をあけたとすると、四角い紙片をはりつけずに桜の花の形に切った紙をはる」も、そうした日本人の心を的確に表している。モース・コレクションは、「作る人」「使う人」「集める人」がそれぞれ「もの」に真摯に向き合うからこそ成り立ち、そして今日に伝えられているのだと感じた。

毎号の精神神経学雑誌の発刊も、モースが尽力したこれら一連の作業に似たところがあるように思う。その鋭い観察眼のもとで日々の臨床の中から掬いとられた疑問や発見をもとに、学会員の先生方が推敲を重ねて論文を執筆し本誌に投稿して下さる。その玉稿を集め雑誌に編んでゆくのが私たちの役割である。その過程で査読作業があるが、著者に敬意を払い慎重に審査し、読者がより良く知見を活用できるように意見や提案などもさせていただく。出版は医療や社会に資するべく広く公表することであるとともに、後進や後世のために残し伝えていくという作業でもある。モースが私たちの祖先の精神的に豊かな生活の様子を丁寧に美術館に収蔵し、そして100年経って身近から消えたその時代を私たちにありありと伝えるように、精神神経学雑誌も「作る人(著者)」「使う人(読者)」「集める人(編集・出版関係者)」が「もの(論文、すなわち真実)」を地道に探求し続けてきたからこそ、その100年の歴史を有するのであろう。

ところで、ご多分に漏れず精神神経学雑誌も当面は紙媒体も残されるものの、主には電子書籍化されることになっている。私たちにとって電子化は非常に便利で有用だと思うし、後の時代に残すという点でも多くの利点があろう。一方で、モースの残した品々を食い入るように観賞しその質感までも味わった後においては、電子化して残されるということにいささか実感が湧かない感じもする。そんなことは電子機器やソーシャルネットワークに疎い私の不案内ゆえであろうが、100年後までも論文と雑誌を確実に伝えていくことは代々の編集委員の使命であろうと、改めて身の引き締まる思いがしている。 根本隆洋